

「家がいいね」 第100号

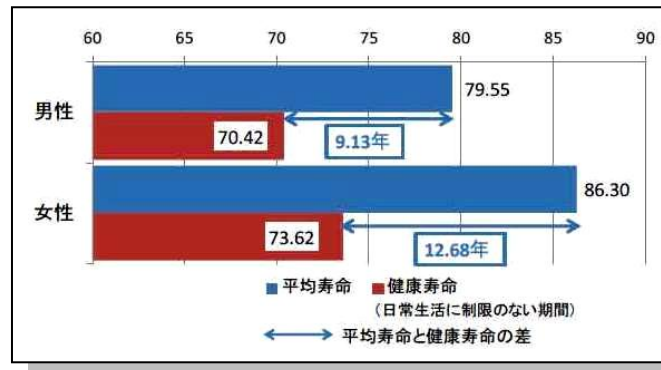
いせ在宅医療クリニック 広報月刊紙

2012. 9. 10

挨拶では「いつまでも、お元気でね」と

申し上げたのですが現実を直視し、書きたい事を書くというのが、この広報紙のモットーです。

6月に厚生省が健康寿命と平均寿命の差を発表していました。その期間は男性9年、女性12年、平均しても10年は日常生活に支障を持ちつつ生きなければなりません。俗に言うピンピンコロリは、高嶺の花という訳ですね。自分に残された機



能をリハビリで掘り起こし、自然な気持ちで助けを求める生き方へ、考えを変えなければなりません。「今まで普通にしていたことを、できないのが情けない」と憤る高齢者が、何歳になっても多いのには驚きます。いつまでもゴールを見据えられないのは人生の危機です。何ができるできないより最期をどう振る舞うかという態度が大切です。

月が綺麗になってきました
少しずつ夕暮れが早くなっ

て、気が付けば東の空に月が昇っています。月夜の雲は、ひととき美しく見えますね。

まだ虫の音は、かすかなものですが、春夏秋冬の季節は約90日で次々と巡ることを、こころ静かに受けとめてみましょう。月夜の物影も、誠にくっきりしています。

月は自ら光っていないのに、なぜあんなに輝いているのでしょうか。太陽光を受けている以上に色々な想いを受けとめているから、と空想します。



自ら考えた、「食べられなくなったら」

9月2日(日)午後、伊勢日赤「やまだ」ホールで開かれた市民公開講座の概要をお伝えします。「終わりよければ」いせの会が呼び掛けた討論会の中では最も充実したものになりました。250部を用意した資料が全て配布され、会場は大盛況でした。さらに参加者に講師が確認したところ、8割が一般市民でした。4分の3の人がアンケートに協力し、80代を含み60代以上が半数という高齢女性(相当数が介護者)主体の参加でした。

講座の第1部は、病院での現状を医師と医療相談員が説明され、急性期病院の治療へ入は速く、家族が胃瘻(いろう)への結論を回答する猶予時間は少なく、施設の意向も影響することです。

2部では、当事者・在宅医・ケアマネが、胃瘻導入から退院、口から食べられたので胃瘻中止の経過と意思決定の実例を語りました。次に山梨県の歯科衛生士、牛山京子さんが口腔ケア(口が機能する条件を作り、食べる意欲を維持する)のポイントを分かりやすく解き明かされました。

最後に、参加者から当事者としての質問が多数出され、発表の講師と具体例を考えあいました。本人と家族が、普段から率直に話し合あうことが最良の事前意思決定になると、皆が確認しました。

遠路をお越し頂いた牛山さん(前列左から二人目)を囲んで、夕食懇談をしました。伊勢市の歯科衛生士さんが多数集まられ、歯科医さんや当会のメンバーが顔の見える関係になりました。口から食べ続けるための支援協力体制の糸口です。



自宅での人生を
最期まで支援します

〒516-0805
三重県伊勢市御園町高向 927
電話 0596-20-8104
ファクス 0596-20-8105
メール homecare@kr.tcp-ip.or.jp
ホームページ <http://isezaitaku.com>